

ミルの定義論と自然主義的メタ倫理学

久 米 暁

はじめに

ジョン・スチュアート・ミルは『功利主義』で、人が実際に幸福を望んでいるという事実に基づいて幸福が望ましいものであることを「証明」しようとしたが、このミルの議論を後にムーアが『倫理学原理』において「自然主義の誤り (naturalistic fallacy)」の一例として強く批判したことはよく知られている。しかしミルの議論が、ムーアによる一撃で息の根を止められるほど単純なものではないこともまた既に大方の見方として定着しつつあるように思われる。本論文は、『功利主義』におけるミルの「証明」の議論を再解釈してミル流自然主義の真相を明らかにするというオーソドックスな研究は行わない。その代わりに、『功利主義』(1861年初版)に先立って執筆されたミルの名著『論理学体系』(1843年初版)の議論、特に第一篇「名と命題について」第八章「定義について」で示されたミルの定義論を参照することによって、ミルが考えていたかもしれない、あるいは考えることができたであろう自然主義的なメタ倫理学上の立場を想像するというヘテロドックスな手法を試行する。

第1章では、『功利主義』におけるミルの自然主義的議論とムーアによる批判を、第2章では、ムーアによる自然主義批判に対抗する現代の自然主義の代表的理論(分析的な自然主義と総合的な自然主義)を紹介する。第3章では、ミルの定義論を分析して、定義は、「言葉に関わる命題 (verbal proposition)」すなわちアプリアリな分析命題であるとするミルの標準見解を踏まえつつ、それに尽くされないミルの定義論の展開を明らかにしたうえで、第4章では、現代の代表的なメタ倫理学上の自然主義理論には収まりきらない独自

の立場として、ミルに可能であった自然主義的見地を提示する。

1 『功利主義』におけるミルの自然主義とムーアの批判

「善い行為とは私たちに快をもたらす行為である」という功利主義の原理を「証明」しようとしてミルは『功利主義』第四章「功利性の原理についてどのような証明が受け入れ可能か」において次のように述べた。

ある物体が見えるということについての唯一可能な証明は、人々が実際にそれを見ているということである。ある音が聞こえるということの唯一の証明は、人々がそれを聞いているということである。その他の源泉についても同様である。同様に、何かが望ましいということについて示すことのできる唯一の証拠は、人々が実際にそれを望んでいるということであるように私には思える。・・・しかし、これは事実であるから、幸福が善であるということについて・・・事情が許す限りでのあらゆる証拠だけでなく、要求しうるあらゆる証拠を私たちは手にしているのである。(Mill 1861, 234)

望ましい行為とは私たちが望んでいる行為であり、私たちは幸福を望んでいるのだから、善い(=望ましい)行為とは幸福をもたらす行為であることになり、さらに幸福とはすなわち快なのだから、「善い行為とは快をもたらす行為である」という快樂主義的功利主義の原理が導き出される。

しかし、この議論は、20世紀初頭に出版されたムーアの『倫理学原理』において手厳しい批判を浴びることになる。ムーアによれば、何かが望まれているということから何かが望ましいということを導くことはできない。人が幸福や快をそれ自体のために実際に望んでいるという心理学的事実から、幸福や快が望ましい、つまり幸福や快は善いという価値は導出されえない。人々が望ましくないものを望んでいるという論理的可能性があるからだ。

ムーアは、ここでミルが「望ましい」という価値を「私たちが望んでいる」という事実によって定義しようとしているとし、その議論を、価値を事実によって定義しようとする「自然主義の誤り」の典型例として批判した（Moore 1903, 66-7）。「自然主義の誤り」は、「善いとは進化しているということである」と考えた進化倫理学等にも指摘される（Moore 1903, 49）。「善い」という価値を「進化している」という事実で定義しようとしているからである。

価値を、価値を含まないなんらかの事実によって定義しようとする「自然主義」の試みが「誤り」であると言えるのはなぜか。それを示すのが「開かれた問い論法」（open question argument）である。「独身とは結婚していないことである」という定義の例を使おう。この場合、「A は独身である。さて、A は結婚していないのか」という問いは「開かれていない」。つまり言葉の意味からして、結婚している可能性は最初から排除されており、その問いを問うこと自体がナンセンスである。これは「独身」が「結婚していない」と同義であるから生じる。定義を試みている文を、この種の問いが開かれているかどうかのテストにかけ、開かれていなければ同義であることが示されて定義は成功していることが分かり、開かれていれば同義ではなく定義が失敗していることが分かるというわけである。では「善いとは快をもたらしことである」「善いとは進化していることである」といった定義をこのテストにかけてみる。「A は善である。さて、A は快をもたらしのか」「A は善である。さて、A は進化しているのか」という問いは少なくともナンセンスな問いではない。であるならば、「善い」と「快をもたらし」「進化している」というのは同義ではなく、「善い」を「快をもたらし」「進化している」で定義することは失敗していることが示される。言い換えると、「善いものは快をもたらし」「善いものは進化している」といった、価値に事実を述定する命題は分析命題ではないのである。ムーアは、この「開かれた問い論法」を使って、道徳的性質をなんらかの自然的性質で定義することはすべて誤りであると論じた。

2 現代の自然主義

そこで、ムーア以降の現代の自然主義は、ムーアによる自然主義批判に対して対処することで自らの立場を提案するよう迫られる。大きく分けて二通りの対処法がある。一つは、価値に事実を述定する命題、たとえば「善は快をもたらす」といった命題は分析命題には決してならないというムーアの議論を再批判して、分析命題であることを示しうる、とするものである。これが分析的自然主義である。もう一つは、価値に事実を述定する命題は決して分析命題にはならないというムーアの議論を認めつつも、だからといって道徳的性質をなんらかの自然的性質に還元したりすることはできない、とはならないと論じるものである。価値に事実を述定する命題はムーアの言うように総合命題であるが、しかしそれでも価値は事実に戻元できるとする立場である。

2.1 分析的自然主義

まずは分析的自然主義である。たとえばムーアは「A は善である。さて、A は快をもたらすのか」という問いは開いていて、したがって「善」と「快をもたらす」とは意味が異なるのだ、と論じたが、しかし、そのように問いが開いていると感じられるのは、私たちが「善」や「快をもたらす」という語の意味をよく分かっていないからかもしれない。私たちの言語実践を踏まえた概念分析を行えば、この二つの語を実は私たちは同義で扱っていることが示されるかもしれない。「善」などの価値語に関する私たちの言語実践を調べて、その語が為している機能を明らかにし、それと全く同じ機能を果たしている事実語（つまり自然的性質を述べている語）があれば、たとえその価値語とその事実語にギャップがあると感じられるとしても、実際には全く同じ機能を果たす同義語であるということになる。ムーアの議論に対して、問いは実は閉じていて、二つの語は分析的に同義であるということを示す、というのが、分析的自然主義の方針である。これはジャクソン（Frank Jackson）とペティット

(Philip Pettit) による「分析的道德機能主義 (analytic moral functionalism)」(Jackson & Pettit 1995) の試みであり、またその路線を継ぐスミス (Michael Smith) による「ネットワーク」分析 (a 'network' analysis)」(Smith 1994, 45) のプロジェクトである (Miller 2003, 232-4; Chrisman 2016, 79-83; 蝶名林 2016, 20-1; 佐藤 2017, 104-9)。

この立場が「分析的」と形容されるのは、簡単に言えば、たとえば「善は快をもたらす」といった価値に事実を述定するなんらかの命題は実は分析命題だと主張するからである。善といった道徳的性質や快をもたらすといった自然的性質についての探究ではなく、「善」といった価値語と「快をもたらす」といった事実語の「言葉に関する」探究、すなわち私たちの言語実践や語の機能・意味への調査によって、それらが「分析的」に「同義」であることを示すからである。それはまた、道徳的性質等をアポステリオリに探究することなしに、言葉の意味関係だけで自然主義を打ち立てるという意味でアプリオリな方法に基づくものである。さらに、私たちの言語実践こそがこの「同義性」を打ち立てる根拠であるから、私たちの実際の言語実践に対して「保守的」であらざるをえない。むろん言語実践の中には誤用や濫用が含まれていて、それらを排除する必要はあるが、それらを誤用・濫用と見なすための根拠も結局は私たちの言語実践にしかないのであるから、実際の私たちの言語実践に対して総じて「保守的」でなければならない。言語実践全体のいわば外側から何か別の根拠に基づいて言語実践を改訂すべしと主張することはできない。

2.2 総合的自然主義

他方、総合的自然主義は、簡単に言えば、価値に事実を述定する命題がアポステリオリな探究に基づく総合命題だとする立場である。先の分析的自然主義は、ムーアの議論に対して、問いは実は閉じている、つまり価値に事実を述定する命題のうちのあるものは実は分析判断だとムーアに反論するのであるが、総合的自然主義は、問いは確かに開いており、価値に事実を述定する命題は分析判断ではなく総合判断であることをムーアとともに認める。

2.2.1 還元主義的な総合的自然主義

そのうえで、還元主義的な総合的自然主義は、それを総合判断だと認めたとしても、道徳的性質が自然的性質に還元できるという考えを捨てない。

「明けの明星は宵の明星である」という例を使おう。「明けの明星」と「宵の明星」は意味が異なるので総合命題であり、この命題の発見にはアポステリオリな探究が必要であった。しかし、「明けの明星」も「宵の明星」も指示対象は金星であって同一である。アポステリオリな総合命題であったとしても、「明けの明星」と「宵の明星」が存在者として別個であるというわけではない。同様のことが、道徳的性質と自然的性質との間でも言えるかもしれない。たとえば「善は快をもたらす」はアポステリオリな総合判断であるとしても、「善」という道徳的性質と「快をもたらす」という自然的性質とが、「明けの明星」と「宵の明星」の場合と同様に、存在として同一である可能性がある。

存在として同一であるということが存在としての還元であるのなら、たとえばムーアの言うとおり意味の同一性を言う定義にはなっていないとしても、アポステリオリな探究によって道徳的性質を自然的性質に存在として還元するような総合命題を提出できるということになる。このような還元主義的な総合的自然主義はレイルトン (Peter Railton) が採った立場とされる (Miller 2003, 178-82; 蝶名林 2016, 19-20; 佐藤 2017, 109-13)。レイルトンによれば、彼自身は「道徳的特性についての^ア^ポ^ス^テ^リ^オ^リ^な説明」(Railton 1993, 317 傍点引用者)を行う「方法に関する自然主義者 (methodological naturalist)」(Railton 1993, 315)であり、かつ「道徳的価値という特性と複雑な非道徳的特性との^総^合^的^な^同^一^化 (synthetic identification)」(Railton 1993, 317 傍点引用者)を主張する「実体に関する自然主義者 (substantive naturalist)」(Railton 1993, 315)なのである。

さらに言うと、道徳的性質と自然的性質についてのアポステリオリな探究に基づいて、この総合判断を発見し、どういった場合に私たちが道徳語を使った判断をすべきなのかを示すのであるから、この立場は私たちの言語実践に対して改訂的でありうる (Miller 2003 180; 182-4)。言語実践は、道徳的性質と

自然的性質の存在のあり方に基づいて為されるべきであるから、言語実践の外側から事実に基づいて改訂を促されるのである。

2.2.2 非還元主義的な総合的自然主義

さらに付け加えておくと、総合的自然主義には非還元主義的な立場もある。これは、道徳的性質が他の自然的性質で定義できるとか、他の自然的性質に還元されるとは主張せずに、道徳的性質はそれ独自なものとして自然界に存在するとする立場である。この立場は、ボイド (Richard Boyd)、スタージョン (Nicholas Sturgeon)、ブリンク (David Brink) といった米国のコーネル大学と関係のあった人たちによって追及されたため、コーネル実在論 (Cornell Realism) と呼ばれる。(Miller 2003, 138-9; 佐藤 2017, 117)

道徳的性質が独自なものとして存在すると考える点は、非自然主義的実在論 (Non-Naturalistic Realism) と同じである。非自然主義的実在論は、道徳的性質が他の種類の自然的性質とは異なると主張した上で、道徳的性質は、アポステリオリな探究とは異なるアプリオリな認識能力によって把握され则认为る。たとえばムーアは「自然主義の誤り」を指摘して道徳的性質と自然的性質との峻別を説いた上で、道徳的性質を人は「直覚 (intuition)」によって把握すると考えた (Moore 1903, 144)。非自然主義的実在論は、道徳的性質は、経験的探究能力とは異なる認識能力によって把捉される特別な対象であり、それは自然界つまり経験的探究能力の対象である経験的世界とは別個な世界に存在する则认为る。

それに対し非還元主義的自然主義は、道徳的性質は、たとえ他の自然的性質に還元されえなくとも、あくまでも経験的な自然科学的研究の対象として自然界に存在する则认为る。この立場は、まず、私たちの道徳的経験を説明する際に、道徳的性質が実在するという想定が最善の説明のために必要であること、そして素粒子といった自然科学の理論的措定物が実在するということの根拠も最善の説明における実在想定の一必要性であると論じ、したがって道徳的性質も自然科学の理論的措定物と同様に自然界に実在すると論じるのである。道徳的

性質を他の自然的性質に還元することなく、自然科学と同様の経験的方法に基づいて道徳的性質そのものが独自なものとして自然界に存在すると論じる (Sturgeon 1985, 191-2) のが、非還元主義的な総合的自然主義の企てである。

3 ミルの定義論

ミルは、ムーアによって、道徳的性質（価値）を自然的性質（事実）で定義するという「自然主義の誤り」を犯していると批判され、またそれを受けて、現代の自然主義をめぐる議論では、道徳的性質を自然的性質で定義することが誤りか否かが中心的なテーマの一つとなってきた。そこでミル自身が「定義」についてどのように考えているかを確かめるために、『論理学体系』第一篇「名と命題について」第八章「定義について」の議論を見ていくことにしよう。

3.1 「言葉に関する命題」としての定義

3.1.1 定義と共示内容

ミルによれば、ある語の定義とは、その語の共示内容（*connotation*）つまり意味を明確に述べる命題である。したがって共示内容を持たない語については定義することはできない。たとえば、固有名は、ミルによれば、共示内容を持たない (Mill 1843, 33)。したがって固有名を定義することはできない。

「トムソン将軍の息子である」ことを述べることは、「ジョン・トムソン」の定義ではない。というのも、ジョン・トムソンという名はこの内容を意味しないからである。同様に、彼が「今、道を横断している男である」と述べることもまた、「ジョン・トムソン」の定義では全くない。これらの命題はその名で呼ばれる特定の人物が誰であることを知らせるために役立つかもしれないが、・・・それは定義の一つの仕方とはみなされてこなかった。(Mill 1843, 133)

他方、共示内容を持つ「共示名 (connotative name)」は定義することが可能である。典型例はミルの言う「具体・一般名 (concrete general name)」つまり対象を表わす一般名である。ここでは「人」という「具体・一般名」を取り上げて話を進めよう。

3.1.2 完全な定義

ミルによれば、最も正確な形式の定義は、「「人」という語はかくかくしかじかの属性を意味する語である」(Mill 1843, 134) というように、「語」や「意味」、あるいは「属性」という語に言及して定義する形式である。しかし日常的にはむしろ、「人はかくかくしかじかである」といった、人に属性を述定する形をとることが多い。ミル曰く「その名を、それと同じ属性の集まりを共示する、意味が知られている別の名あるいは複数の名によって述定する」(Mill 1843, 134) 方法をとるのが一般的であり、この方法には大きく分けて二通りある。同じ意味の共示名を述語に与える、たとえば「人は人間である」とするか、あるいは定義項の名の共示内容全体を述語で与える方法である。この後者の方法は、さらに、属性と同数の名を使って定義する方法（たとえば「人は身体を持っており、組織を持っており、動き回り、理性的な存在であり、しかじかの姿をしている」）か、それらの属性をまとめて共示する名を使う（たとえば「人は理性的な動物であり、しかじかの姿をしている」）かである。いずれにせよ、ミルの言う「完全な定義」とは、定義される語の共示内容の全体をいずれかの仕方ですすものである。(Mill 1843, 134)

このことをミルは、「名の定義とは、その名を主語として構成し得るすべての本質的命題の総和である」(Mill 1843, 134) と表現する。ミルによれば、「本質的命題 (essential proposition)」(Mill 1843, 110) とは、対象の本質を記述している命題に見えながら、実は「実在に関わる命題 (real proposition)」(Mill 1843, 115) ではなく「単に言葉に関わる命題 (merely verbal proposition)」(Mill 1843, 109) である。それは「同一命題 (identical proposition)」(Mill 1843, 113) すなわち、主語の共示内容に含まれているも

のを述語とする命題、いわゆる分析命題なのである。

例えば「すべての人は身体をもった存在者である」「すべての人は生物である」「すべての人は理性的である」とった命題は、すでに人という語の全意味を知っている者に対してはなんの知識も伝えない。というのも、人という語の意味には、これらすべてが含まれているからであり、どの人もこれらすべての述語が共示する属性をもっている、ということは、その人が人と呼ばれた時にすでに主張されていたことだからである。本質的命題と呼ばれてきた命題はどれもこうした本性をもっている。実際、それらは同一命題なのである。(Mill 1843, 113)

本質的命題はしたがって、純粹に言葉に関する命題である。・・・その命題は何の情報も与えないか、あるいは物についてではなく名についての情報を与える。非本質的な、あるいは偶有的な命題は逆に、言葉に関する命題と対比して、実在に関する命題と呼ぶことができる。・・・この部類の命題だけが、それ自体で知識を拡張し、また知識を拡張する命題を推論によって導くことができる。(Mill 1843, 115-6)

この区別はカントや他の形而上学者によってなされた区別、すなわち分析判断と総合判断と彼らが名づけたものの間の区別と一致している。分析判断とは、使われている名辞の意味から引き出すことができる判断のことである。(Mill 1843, 116)

ミルによれば、定義を表わす命題は、「本質的命題」であり、それは実在に関わらない「単に言葉に関わる命題」「同一命題」つまりアプリアリな分析命題なのである。

3.1.3 本質的であるが不完全な定義

語の定義とは、今述べたように、完全な定義としては、その語の意味・共示内容の全体を述べるものである。しかし、実際の定義の目的は、語の正しい使い方の指針や、慣習から逸れた用法の防止であることが多いので、たとえ語の共示内容全体を捉えていなくとも、その目的を果たすことができるものは定義と呼ばれることがある。「本質的であるが不完全な定義」(Mill 1843, 137)がそれである。

たとえば「人は理性的な動物である」である。この定義は、なるほど「人」の共示内容の一部分を捉え、すなわち「人」の本質の一部分を表わすという点で「本質的」とは言えるが、「人の形をしている」という共示内容を捉えていないので、完全な定義ではない。つまり、この定義に従うと、『ガリバー旅行記』に登場する「フウイヌム」のような理性的であるが馬の形をしている動物も人ということになってしまう。けれども、「フウイヌム」のような理性的であるが人の形をしていない存在者が実際には存在しないので、不完全であっても、「人」の指示対象を切り分けるのに十分に役立ち、慣用通りの使用法を示すことができるので、定義と呼ばれうるし、呼ばれてきた (Mill 1843, 137-8)。

ここまでのところでは、完全であれ不完全であれ、定義とは語の共示内容を述べる「単に言葉に関わる命題」であり、すなわちアプリアリな分析命題である、とするミルの標準見解が維持されている。

3.2 物に関わる定義

しかし、ミルの定義論は、標準見解に留まらない興味深い展開を含む。単に言葉にのみ関わるのではなく、対象についてのアポステリオリな探究に基づく定義をミルは認めるのである。ミルはそのような定義のあり方を二種類に分けて述べている。

3.2.1 偶有的定義もしくは記述

ミルは、先に述べたように、共示内容の一部にしか言及しない「本質的だが不完全な定義」を第一種の「不完全な定義」として挙げたが、さらに第二種の「不完全な定義」として「偶有的定義もしくは記述」(Mill 1843, 137)を挙げる。これは、語の共示内容には言及せずに、語が表わすものの偶有性、すなわちそれが偶々有する属性に言及する定義である。たとえば「人は哺乳類であり2本の手を持っている」「人は食べ物を調理する動物である」「人は羽のない2足動物である」といったものである。これら偶有的定義つまり「記述 (description)」(Mill 1843, 138)は、定義項と被定義項とが「置き換え可能」(Mill 1843, 138)すなわち「厳密に同一の外延をもつ」(Mill 1843, 138)のであり、「定義は、名によって述語づけられるものは何であれ述語づけることができ、それが述語づけられないものは何も述語づけられないのでなければならない」(Mill 1843, 138)と言われる。外延 (denotation) さえ同じであれば、共示内容 (connotation) が同じでなくとも、指示対象を区分けすることはできる。そのため、第一種の「不完全な定義」である「本質的だが不完全な定義」と同様に、指示対象を他のものから区別するという「定義」の役割を果たすことはできる。しかし、これらは「人」の本質から引き出されておらず、すなわち「人」の共示内容を述べていないので、「すべての論理学者から真正の定義の地位を剥奪され、記述と呼ばれてきた」(Mill 1843, 138)。つまり「本質的命題」・「言葉に関する命題」・分析命題ではないからである。

しかし、ミルは、それが単なる偶有的定義・記述であっても、場合によっては真正の定義となりうるという。まずは学術的定義の場合である。

特定の学問の目的のために、あるいは1人の著者の特定の学説をより便利な仕方と述べるという目的のために、何らかの一般名に、その指示を変更することなく、その通常の共示内容とは異なる専門的な共示内容を与えることは望ましいということはある。これが行われるとき、その専門的な共示内容を構成する属性に基づく名の定義は、一般的には偶有的な定

義または記述にすぎないとしても、特定の場合や特定の目的のためには、完全で真正の定義となる。(Mill 1843, 138)

ミルはこのことを博物学者キュヴィエによる「人は2本の手を持った哺乳類である」という学術的定義を例に説明する。

その定義の目的は名を詳しく説明することではなく、分類項目を詳しく説明することである。キュヴィエが人という語に与えようとした専門的な意味（それは、その通常の意味とはまったく異なるが、語の指示内容 **denotation** にいかなる変更ももたらさない）は、動物をある原則に基づいて、言い換えれば、ある一組の区別に基づいて分類するという計画に付随して生じたものである。そして、通常の語の共示内容に従った人の定義は、たとえそれが定義の他のすべての目的に適っているとしても、その種がキュヴィエによる特定の分類において占めるべき位置を明示するということはなかつただろう。だから、彼はその語に専門的な共示内容を与えたのであり、そうすることで、その語を、学術的な便宜のために動物界の区分の基礎とすると決めた種類の属性によって定義することができたのである。(Mill 1843, 139)

学術的定義は、ある学問によって作られた新しい学術用語に学術的共示内容を与えるか、あるいは現在通用している日常用語に対して新しい学術的共示内容を与えるか、のいずれかであるが、いずれにせよ、語に学術的共示内容を与えることによって、その学問による分類における位置を明らかにするのであり、「学術的定義の主要な目的は学術的な分類のための指標としての役目を果たすことである」(Mill 1843, 139)とする。たとえば「人は2本の手を持った哺乳類である」というキュヴィエによる定義は、「人」という日常用語は「身体を持っている」「組織を持っている」「動き回る」「理性的である」「人の形をしている」という共示内容をもつ語であることを考えれば、「人」の日常的共示

内容の全体も一部さえも述べていないという点では、学問的探究によってアポステリオリに発見された偶有的属性を述べる記述でしかない。しかし、その定義は、キュヴィエの博物学の分類において人が有する位置を示す学術的共示内容「哺乳類である」「2本の手を持つ」を述べているという点では、それは真正な定義と言えるのである。つまり、探究によってアポステリオリに発見される偶有的属性が学術的な共示内容に組み入れられることによって、偶有的定義・記述が定義（すなわち共示内容を述べるもの）となるのである。

また、ミルは「あらゆる学術的な分類は常に学術的知識が前進するとともに修正されるので、学術的定義もまた常に変化していく」(Mill 1843, 139)と述べる。経験的探究に基づいて分類が変われば、それに基づいて学術的共示内容が変わるので、それによって学術的定義も変わっていくのである。

3.2.2 哲学者が問う定義

定義に関して「言葉に関する命題」説を基本的に採用したミルが、上のような専門用語の学術的定義の場合と並んで例外として認める定義のケースは、例えば以下のようないわゆる哲学者の問う定義である。

本章で述べられている意見に従えば、定義は本来は名のみに関わり、物には関わらないが、そのことから、定義が恣意的であるということまで帰結するわけではない。名をどのように定義するかは、非常に難解で複雑な問いでありうるだけでなく、名によって指示される物の本性に深く立ち入った考察を含みうる。例えば、プラトンの対話篇の最も重要な主題を成す「レトリックとは何か」(『ゴルギアス』のトピック)や、「正義とは何か」(『国家』のトピック)のような問いがそれに該当する。ピラトによって冷笑的に尋ねられた「真理とは何か」や、あらゆる時代の思索的な道德哲学者たちにとって根本的な問題である「徳とは何か」もそうである。(Mill 1843, 150)

上のような難解で高貴な問いを、名の慣習的な意味を確かめること以上のことを意図しないものとして表現することは間違いだろう。それらの問いは、名の意味が何であるかを決めるというよりは、何であるべきかを決めるための問いである。それは、専門用語についての事実に関わる他の問題と同様に、私たちが、名の持つ性質だけでなく、名付けられる物の持つ性質に立ち入る、それも時にはとても深く立ち入ることをその解決のために必要とする問いである。(Mill 1843, 150)

ミルによれば、「正義とは何か」「徳とは何か」といった問いは、言葉の定義に関する問いの形式をもっているが、しかし、その言葉を私たちがどう使っているかという言語慣習を調べることによって答えるべき問いではなく、「正義」「徳」といった語によって指示されている事柄の本性に深く立ち入って、正義や徳が何であるかという探究を行い、その探究に基づいて「正義」や「徳」の意味を決定する、いわば私たちの言語使用に対する改訂的な試みによって答えるべきものなのである。

ではこのような改訂的探究はどうして必要になるのか。ミルによれば、単純な言葉については、語の使用者はその共示内容をはっきりと把握しつつ、その語を使っているが、より複雑で難解な言葉の場合は、はっきりとした共示内容を意識せずに、単に、その語で呼ばれてきた事柄と全体としてなんとなく似ている事柄にその語を適用していくということが生じる (Mill 1843, 151)。つまり、ある語で呼ばれる諸対象同士には、全体としての漠然とした類似性しかないのである。さらに、こうした曖昧な類似性の連鎖によって、語が次々にその適用範囲を広げていき、「その連鎖的なつながりは、名が与えられた最初の物とまったく共通点がない物に適用されるに至るまで続いていく」(Mill 1843, 152)。そしてついには「名は最終的には、何の共通点もない対象の混乱した寄せ集めを指示しはするが、何も共示することはなく、曖昧な全体としての類似を共示することすらもない、ということになる」(Mill 1843, 152)。こうなると、例えば、「正しい」といった言葉を使っている、実際には何を主

張しているのか分からなくなり、その名は「思考にも、思考の伝達にも適さなくなる」(Mill 1843, 152)。ここに至って「正義とは何か」という問いを提示して、「正しい」と呼ばれる事柄を探究し、それに基づいて、「多方面わたる指示の一部を取り除き、その名の指示を、それが共示し得る何らかの属性を共通に持つ事物に限定する」(Mill 1843, 152)という、改訂的な作業を行う必要が生じるのである。

ではこの改訂的な探究はどのように進むか。

「正義とは何か」という問題は、別の言い方をすれば、「人々がある行為を正しいと呼ぶとき、彼らが述語として与えようとしている属性は何であるのか」に置き換えることができる。これに対する最初の答えは、この点について完全な意見の一致には達していないので、人々はどの属性も明確な仕方では述語として与えようとはしていない、というものである。にもかかわらず、人々は皆、自分たちが習慣的に「正しい」と呼ぶすべての行為が何らかの共通の属性をもっていると信じている。そこで、「そのような共通の属性はあるのか」が問題となる。(Mill 1843, 152)

この問題意識から以下のような4つの問いが順に発せられることになる。

そもそも〔第一に〕「それらの行為が共通の性質を持つのか、という問いが可能な問いになるほどまでに、人々が、個々の行為のうち、どの行為を正しいと呼び、呼ばないのかについて、お互いに十分に一致しているか」。一致しているのだとしたら、〔第二に〕「それらの行為は本当に共通の性質を持つのか」。また、持つとすれば、〔第三に〕「それは何であるのか」。これら三つのうち最初のものだけが、〔言語の〕用法と慣例についての問いであり、他の二つは事実についての問いである。そして、もし第二の問題（「行為はそもそも部類を形成するか」）への回答が否定的であるとすれば、まだ第四の問題が残されている。第四の問題は他の問題よりも骨

の折れる問いであるが、それは「名が指示し得る部類を人為的に作る最良の方法とは何か」というものである。(Mill 1843, 152 [] 内引用者)

この箇所でミルは、言語使用における一致に関する最初の問いだけが「言葉に関わる」問いであり、その後の、「正しい」と言われる諸行為に共通の性質があるかという問いや、その性質が何であるかという問いは、「言葉に関する」問いではなく、諸行為の性質に関する「事実についての問い」であると述べている。しかもこの問いに対する探究は、諸行為を見ればその性質がすぐに見つかるというような単純なものでは決してない。また、指示対象が広がる前の当初の意味を取り戻すという保守的な作業でもない。類似性の連鎖によって広がった指示対象の「可能ならばすべてを、そうでなければ、少なくとも大部分あるいは主要な部分を、指示し続ける」(Mill 1843, 153) ことができるような語の意味を新たに発見していく探究が要求される。類似性の連鎖によって次第に指示対象が変化していったという事実は「語によって指示される物の間の実在する関連性の指標となる。この実在する関連性は、そのようなことがなければ、思想家たちの目にとまることはなかったかもしれない」(Mill 1843, 153) とミルが述べるように、哲学者は、広がった指示対象の間に、これまで知られてこなかった新たな関連性を突き止める必要があるのである。

こうした共通の属性が突き止められ、特定されれば、類似した対象に共通に与えられている名は、曖昧な共示内容に代えて判明な共示内容を獲得する。そして、この判明な共示内容を持つことによって、名は定義可能となる。(Mill 1843, 154)

しかし、哲学者はこのように、たとえば「正しい」と呼ばれる行為同士に共通する表面的な一致点を見出したとしても、そこで立ち止まらずに、その表面的な共通性質のさらなる原因の探究へと向かう。たとえば「水」と呼ばれる物には「無色・透明・無臭」といった表面的な共通性質が見つかるが、科学者は、

それらがそうした共通性質をもつ原因をたとえば H_2O という分子構造等によって説明しようとするのと同様である。

しかし、これらのあからさまで表面的な一致が依存する、より隠れた一致を洞察することは、学問上の問題において最も難解なものの一つである。それは最も難しい問いの一つであるのと同時に、紛れもなく最も重要な問いの一つである。そして、こうした、ある部類の諸物がもつ性質のさらなる原因に関する研究の成果に、「ある語の意味が何であるだろうか」という問いが付随的に依存する。なので、哲学が私たちに提示する最も深淵で最も価値ある探究のいくつかは、名の定義の研究によって導入され、その装いの下で現れてきたのである。(Mill 1843, 154)

「水とは何か」「正義とは何か」といった学問的問いは、「水」「正義」という語の意味を問うていると言えるが、しかし、それは、それらの語で呼ばれる対象にこれまで知られなかった共通性質を発見し、さらにはその共通性質のさらなる隠れた原因を見出すことによって答えるべき難解にして価値ある問いなのである。

3.3 ミルの「種類」論

ではこの探究はどこで終わりを告げるのであろうか。ここでミルの「種類」論を参照すべきである。ミルは「部類 (class)」を、「種類 (kind)」とそれ以外に区分し、「種類」については、それを特徴づける性質を私たちは知り尽くすことができないが、「種類」以外の「部類」については、それを特徴づける性質を挙げることができる、とした。分かりやすく言えば、「種類」ではない「部類」のほうは、ある属性に基づいて私たちが構成した部類なので、それを特徴づける属性は確定している。ミルの例を使うと、「数学者」「キリスト教徒」という部類はそれぞれ「数学を専門とする」「キリスト教を信じている」といった属性で特徴づけることができ、それ以上を必要としない。「種類」以

外の「部類」を表わす語の共示内容は確定しているのである。それに対して「種類」のほうは、私たちが作ったのではない実在する種類、いわば「自然種」なので、「種類」に関する探究が進むにつれて、それを特徴づける性質が増えたり、変更されたりする可能性がある。「種類」を表わす語の共示内容は、探究が進むにつれて変わりうるのである。

私たちは、キリスト教と・・・結びつけられていないどんな性質が、すべてのキリスト教徒に共通であり、特有であるかを探究しようとは決して考えないだろう。しかし、人間全体に対しては、生理学者たちは、絶えずそのような探究をし続ける。彼らが完全な答えを得るということはあるそうにない。それゆえ、人間は種と呼ばれ得るが、キリスト教徒や数学者は種とは呼ばれ得ない。(Mill 1843, 124)

であるなら、「種類」を特徴づける性質、つまり「種類」語の共示内容についての探究には終わりが無い。そして常にその性質や共示内容が更新される可能性が開かれている。たとえば「善」が「種類」だとするならば、「自然種」の場合と同様に、その共示内容がアポステリオリな探究に基づいて変更されていく可能性が常にあることになる。

3.4 ミル定義論の要約

ミルによれば、語の定義とは語の共示内容を述べるものである。標準的には、それは「言葉にのみ関わる命題」すなわちアプリオリな分析命題である。したがって、アポステリオリで総合的な偶有的定義・記述は、語の共示内容を述べるものではないので、本来は「定義」ではない。けれども、以下の場合においては、それは真正な定義となるとミルは考えた。一つは専門的学術用語の定義である。新たに学術用語を導入する場合と、日常用語に学術的意味を与える場合とがあるが、いずれにしても私たちは、対象に関する学問的探究に基づき学問的分類における位置を示す属性を共示内容としてその語に与え、さらに

は学問的探究の発展によって共示内容を変更し、定義を変えていく。第二は、日常用語の適用範囲がむやみに広げられてしまったために、その日常的共示内容が失われている場合である。この場合も、語が適用されている対象を探究し、共通の属性を見出し、それを共示内容として与えるという作業が行われる。しかし、それは当初の共示内容を取り戻すという保守的な単純作業ではなく、広がった指示対象を探究することによって、それまでは気づかなかった新たな共通属性を発見し、それを新たな共示内容として語に与え、さらにはその共通属性のさらなる原因を探究するという最も難解で最も価値ある学問的研究によって、共示内容が洗練されていく。しかも、「種類」に対する研究である限り、「種類」語の共示内容の検討と変更には終わりが無いのである。

4 考えうるミルの自然主義

現代の自然主義を「分析的」自然主義と「総合的」自然主義とに分けた。「分析的」自然主義は、たとえば「善は快をもたらす」が「言葉のみに関わる」アプリアリ分析命題であると考えうるとした。「総合的」自然主義は、「実に関わる」アポストリアリ総合命題であると考えた。しかしミルの定義論を参照すると、上の二つとは異なる、もう一つの可能性が浮かび上がる。「善は快をもたらす」はアポストリアリ分析命題であるという考え方である。アポストリアリ総合命題である「偶有的定義・記述」は、ミルはそのままでは語の共示内容を述べていないので、「定義」であるとは言えないとしていたが、例外的な特殊ケースにおいて、それが真正な定義となると考えた。それは、語の指示対象に関するアポストリアリ探究に基づいて、その語の共示内容が新たに構成されるケースである。この場合、「実に関わる」アポストリアリ探究に基づいてはいるものの、いったん語の共示内容が構成されさえすれば、それは「言葉に関わる」分析命題となり、真正な定義となるのである⁽¹⁾。

(1) ミルの言語哲学におけるアポストリアリ分析性の可能性については、拙論（久米2022）を参照。

特殊ケースであるという点が重要である。アポステリオリな分析的定義を生む特殊ケースは、先に見たように、第一に、専門用語としての学術的共示内容が与えられるケース、第二に、共示内容がすでに失われてしまっていて今から構成されるケース、第三に、ミルの言う「種類」に関する命題のケースである。「種類」に関する命題という第三のケースについて説明を加えると、「水は H_2O である」は、「水」が「自然種」であるがゆえに、共示内容が変更されて「 H_2O である」を含むようになり、分析命題となったケースであると考えることができる。 H_2O でないものは、もはや私たちは水とは呼ばないからである。これに対して「反芻動物は偶蹄動物である」は普遍的真理だとしても分析命題には転化しない。「反芻動物」と「偶蹄動物」とは意味が異なっているからである。この点はミル自身も指摘している (Mill 1843, 141-2)。「反芻動物」「偶蹄動物」は「種類」ではなく、共示内容がそれぞれ「反芻する動物」「足の指が偶数の動物」と確定しており、共示内容が新たに変更される余地がないので、「反芻動物は偶蹄動物である」は総合命題のままである。同様に、「明けの明星」「宵の明星」もそれぞれ「明け方に輝く星」「宵に輝く星」という共示内容が確定していて、互いに異なる共示内容をもつので、「明けの明星は宵の明星である」は、たとえ指示対象の存在論的同一性を述べているとしても、総合命題のままである。

さて、では「善」の定義は、自然主義の見地から見て、この3ケースに当てはまると考えることができるであろうか。第一に、第2章で述べた「方法に関する自然主義」に基づいて、経験的探究を「善」に向ける限り、ミルが挙げた博物学上の動物種や化学における「アルカリ」「酸」(Mill 1843, 139-40)と同様に、「善」という語が専門的な共示内容を帯びることはありうる。第二に、ミル自身が「正義」を例として挙げていることから推測されるように、「善い」という言葉もまた共示内容を失っており、むやみに広がった指示対象を研究することによって、これまで知られなかった共通性質を発見する必要性に迫られていると考えることもできる。「善とは何か」という問いが今日必要であるのはまさにこうした事情によるのかもしれない。さらに、第三に、「善」

は、ミルの言う「種類」すなわち実在的「分類」、つまりいわば「自然種」のようなものであるというのは、実在論的自然主義の代表的な考え方である。したがって、3 ケースいずれに即しても、「善」に関する、自然主義の観点からのアポステリオリな分析的定義は可能であると考えることができる。

ではこのミル流の立場はムーアの「開かれた問い論法」に対してどのように答えるのか。ムーアは、「A は善い。さて、A は・・・か」(・・・は何らかの事実が入る)という問いは開いていると述べ、善を事実で述定する命題は分析命題ではなく、定義として失敗していると論じた。「総合的」自然主義は、ムーアの言うとおり、問いは「意味論的」には開いているが、しかし「存在論的」には閉じうると、すなわち分析的定義としては失敗しているが、アポステリオリな探究に基づく「存在論的」還元は可能であると応じた。本論文のミル流の立場は、アポステリオリな探究に基づいて、分析的定義にさえ至ることができるので、例の問いは「意味論的」にも閉じうると応じる。しかし、アプリアリな「分析的」自然主義とは異なり、単なる概念分析ではなく、アポステリオリな探究によって、分析的定義を構成し、その問いが「意味論的」にも閉じていることを示すのである。

であるとすれば、ムーアの言う「問い」は、「存在論的」にも「意味論的」にも閉じうるのだから、いかなる意味でも閉じうるのであろうか。本論文のミル流の立場は、そうは考えない。この問いは、ある意味において、原理的に開いている。もう一度「水は H_2O である」を例として取り上げよう。「水は H_2O である」は先に見たように、アポステリオリな探究によって得られた分析命題と考える。とすれば「水は H_2O である」は、単に総合的に水を H_2O に「存在論的」に還元しているだけでなく、水の分析的定義ともなっている。この意味で「A は水である。さて、A は H_2O であろうか」という問いは、「存在論的」にも「意味論的」にももはや開かれていない。しかし、「水」が自然種である限り、この定義は今後のアポステリオリな探究によって変更される原理的可能性がある。したがって、その問いは、いわば「認識論的」に開かれているのである。これと同様に、「善」に事実を述定する命題のうちのあるも

のは、アポステリオリな分析命題として、存在論的還元だけでなく意味論的定義として成功する可能性がある。しかしその場合であっても、その後のアポステリオリな探究によってその定義が変更されていく原理的可能性が残る。つまり、ムーアの問いは、ある段階で「存在論的」にも「意味論的」にも閉じることはあっても、しかし「認識論的」には閉じはしない。本論文のミル流の立場によれば、「A は善い。さて、A は・・・か」(・・・は何らかの事実が入る)という問いは確かに開いている。しかし、だとしても、事実への「善」の「存在論的」還元も、事実による「善」の分析的「意味論的」定義も不可能ではない。その問いの開きは、ただただ、そうした還元や定義が今後書き換えられる可能性があることを示唆しているだけなのである。

おわりに

このようなミル流の立場を実際にミルが倫理学において採っているのか、また、現代の自然主義の論者のうちに、このミル流の立場を、ミル解釈とは別に、唱えている人がいるのか等については、機会を改めて考察することにした。

[追記] 本論文は、2022年1月21日に開かれた関学哲学会第40回大会における研究報告「J. S. ミルの言語哲学」の一部を切り取ってそれを詳細に論じたものである。大会時の貴重なコメントと質問にこの場を借りて感謝を申し上げたい。

参考文献

- Chrisman, M. 2016: *What is this thing called Metaethics?*, Routledge.
- Jackson, F. and Pettit, P. 1995: 'Moral Functionalism and Moral Motivation,' *The Philosophical Quarterly*, 45, pp.20-39.
- Mill, J. S. 1843: *A System of Logic, Rationcinate and Inductive: Being a Connected View of the Principles of Evidence and the Methods of Scientific Investigation*, in Vols. VII-VIII of J. M. Robson (ed.) *The Collected Works of John Stuart Mill*, University of Toronto Press, 1973-4 (originally published in 1843).
- Mill, J. S. 1861: *Utilitarianism*, in Vol. X of J. M. Robson (ed.) *The Collected*

- Works of John Stuart Mill, University of Toronto Press, 1973-4 (originally published in 1861).
- Miller, A. 2003: *An Introduction to Contemporary Metaethics* (1st Edition), Polity.
- Moore, G. E. 1903: *Principia Ethica*, Cambridge University Press.
- Smith, M. 1994: *The Moral Problem*, Blackwell.
- Sturgeon, N. 1985: 'Moral Explanations,' In James Rachels (ed.), *Ethical Theory 1: The Question of Objectivity*, Oxford University Press (1998), pp.180-209.
- Raiton, P. 1993: 'Reply to David Wiggins,' In John Haldane & Crispin Wright (eds.), *Reality, Representation, and Projection*, Oxford University Press., pp.315-28.
- 久米暁 2022 : 「ミルとクリプキに関する試論－固有名・自然種名・アポステリオリな分析性」, 『人文論究』第 72 巻第 3 号, pp.1-23
- 佐藤岳詩 2017 : 『メタ倫理学入門－道德のそもそもを考える』, 勁草書房
- 蝶名林亮 2016 : 『倫理学は科学になれるのか－自然主義的メタ倫理説の擁護』, 勁草書房

(文学部教授)